

平成 23 年 5 月 14 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 23 年 第 4 回講話

古老の言い伝え

おはようございます。

先月、1 週間かけて被災地をずっと回って参りました。岩手県の普代村というところに行き参りました。普代村の広報誌を回覧致します。なぜ普代村に行ったかと申しますと、今回の大震災で政治家が想定外という言葉をよく使いましたが、民間で想定外と言う社長がいたら、即座に退陣だと思っています。毎日が想定外の繰り返しなのだから、想定外が言い訳になって免責になるのだったら、そんな楽なことはありません。政治家とは楽な商売だなと感じたりしました。

想定外の大津波を想定し、堤防を作っていた村が普代村です。その堤防で大津波を見事に撃退して、一人の死亡者も出さず、民家も一軒も流れませんでした。なぜそういう防潮堤を作ったかという、<昔 15 メートルの津波が来たから、それ以上の防潮堤でなければならぬ>という古老の言い伝えを尊重し、当時の村長が強力に主張して、周りの猛反対を押し切って 15.5 メートルの防潮堤と水門を作ったのだそうです。それが今回非常に役に立って、効果を上げたわけです。

広報誌を見ると「激浪、漁港は壊滅」とあって、写真も載っています。実際に行ってみると、海から堤防までの間の漁港は、瓦礫の山で船は壊滅状態でした。今回の津波で普代村の堤防だけが役に立ったのですが、住民は漁港の瓦礫ばかりが焼きついて、自分たちの村の堤防の重要性をあまり感じなかったのかと思います。

今回私は 1 週間ほど太平洋岸のリアス式海岸を見て回りましたが、福島県だけは行きませんでした。放射能の問題があるので、福島県を迂回して宮城・岩手・青森と行きました。ところが大野参与は敢て福島県を選んでマスクを届けに行かれたそうですので、後ほどお話を伺うのが楽しみです。

感想として、現地を見ると見ないのではやはり大分違いました。マスコミは自分たちの伝えたいものだけを大袈裟に過剰報道するという印象がありましたが、今回ばかりは現地の方が凄まじかった。現地の方がはるかに酷い。新聞・テレビ・ネット等は、なかなか実

態を伝えきれないものだという印象を持ちました。

恒例の質問

いつもの質問を致します。連休もありましたので、連休も入れて今日まででお考え下さい。

嘘をほとんどつかなかった方？

良い日だったなと思う日がずっと続いていると思う方？

有難うと言い、有難うと言われる日々が続いている方？

最後の質問は若干手の挙がる人が少なかったようです。「有難う」と自然と口から出すけれども、「有難う」と言われるのはなかなか難しいですね。人さまに何かしてあげないと「有難う」とは返ってこないのです、何かしてあげられるとよろしい。世の中の役に立っていると実感できる良い言葉だと思っています。

今日の論語

では、論語の素読を致しましょう。本日の論語は述而第七 26～32 です。

・・・気持ちよく声が出たでしょうか。論語に限らず古典を読む時は、何度も繰り返し読んでみると、自分なりのイントネーションやリズムが生まれてきて、気持ちよいリズムで読めるようになります。中身が少し見えてきたら、そこで肝心なことは現代に置き換えて考える・自分自身に置き換えて考えてみることです。それができると、論語の文章の状況・イメージが浮かんでくるようになります。生き活きと登場人物が動き始めます。そのようにお読みいただくとよろしい。

では、解説を致します。

【二六】 子 釣し ちょうすれども網こうせず。弋よくすれども宿しゆく いを射ず。

鋼とは網、弋とはいぐるみ、はえ縄です。

孔子は、釣りはするけれども根こそぎ捕るようなことはしない。鳥を狙って射ることはするけれども、寝ている鳥は射かけなかった。

孔子は自分なりのルールを作って、度を越した殺生はしなかったということです。自分たちが釣りをする時、どのような釣りなのか考えてみるとよいでしょう。人類の歴史を考

えてみると、例えば木を伐採するにしても、木からエネルギーを得ているのに、根こそぎ伐採することによって、その文明は滅ぶということが繰り返されてきています。人間の仕業は業が深いなと思います。孔子はそういう部分をクリアしています。

少し前は、貸し剥しという言葉がよく聞かれました。お金を銀行から借りる。今度は銀行の都合でお金を返してくれと言い始めて、根こそぎ持って行ってしまふ。今、政府がやっている東電いじめも、根こそぎ東電から吸い上げてやろうとしています。尚且つ、東電が倒れてしまつては困るから、生かさず殺さず、根こそぎ取つて政府は被害を少なくしようとしているのが透けて見えます。

【二七】 子曰く、蓋し知らずして之を作す者有らん。我は是れ無きなり。多く聞きて其の善き者を択びて之に従い、多く見て之を識す。知るの次なり。

孔子が言うには、ものをよく知らないでことを起こす者がいるけれども、私はそういうことはしない。分からないことは色々な人に聞いて、一番良いと思う人を選んでそれに従い、沢山のものを見聞して記録にとる。これは上智（生まれながらに知っている人）の次の学知である。

私は一所懸命勉強して色々なものを覚えて、現代に活かそうとしているのだ。生まれながらに知っているのではない、と孔子は言っています。

渋沢栄一さんはこの文章の解説で、「上智」、「学知」の他に、心に浮かんだものを何も検証せず思いつきで行動に移す者を「下愚」と言っています。私はそういうことはしないとも言っています。

これはそのまま菅さんに当てはまります。震災の対応について、いくつもの会議を作りました。「多く聞きて」という部分では評価できますが、「船頭多くして船山に登る」状態です。「其の善き者を択びて」で、最も良い一人を選んで、その人の意見に従っていくのがよからうと思います。何か行動する時に、自分が分からなければ信頼できる人からものを教わって実行していくのが良いだろうと思います。これは菅政権に限らず、どこでも同じことが言えます。

【二八】 互郷 与に言い難し。童子 見ゆ。門人 惑う。子曰く、其の進むを与すなり。其の退くを与さざるなり。唯 何ぞ甚だしき。人 己を潔くして以て進まば、其の

いさぎよ　ゆる　そ　おう　ほ
潔　きを与すなり。其の往を保せざるなりと。

互郷という土地は風俗がよくない。そこに住んでいる少年が孔子に会いに来て、ものを教えて下さいと頼んだところ、孔子が応じた。門人たちは、土地柄の悪い少年にどうして孔子は教えるのだろうか戸惑った。

孔子の周りにいるのは、孔子のもとで勉強をして、各国の宰相になるつもりでいるエリートのみばかりです。その中に風俗のよくない土地の者が混ざったのでは、とんでもないと思っているわけです。

孔子が言うには、私は教えを請いに来た者には教える。私の前を去った後で、悪さを見ても見ることは出来ないが許すことはしない。お前たちはなぜ、まだ何もしていない少年に対して厳しく接するのか。出自で人を差別するものではない。人は自分を清潔にして会いに来るのであれば、その潔きを愛でていくらでも教えることを許す。但し、私の前から去った後まで、その人物の保証はしない。

現代に置き換えて考えましょう。新宿の歌舞伎町界隈は、以前は気楽に行けたけれども今はなかなか行きづらくなっていると思います。池袋の或る一帯は、更に行きづらくなっています。日本語が通じない地域が出来ていますから、身包み剥かれそうな気がします。昔、香港に行った時に九龍地区というのがあって、身包み剥かれるどころか命もなくなると言われていました。「君子、危うきに近寄らず」で、そういう所に住んでいる人たちは自分達とちょっと違うと意識しておいた方が良いのかと、ここで感じました。

【二九】　しいわ　じん　とお　われ　じん　ほっ　ここ　じんいた
子曰く、仁　遠からんや。我　仁を欲すれば、斯に仁至る。

これは孔子がなくなる寸前の頃の科白です。「七十にして心の欲する所に従えども矩を踏えず」(七十代になったら、自分がやりたいことをやりたいようにやって人さまに迷惑をかけない、社会の役に立つ)というあたりの心境だと思います。

孔子が言うには、仁とは遠いところにあるのだろうか。いやいや本気で仁を欲すれば、仁はすぐ目の前に現われるものだ。

孔子の教育は、弟子に「これは仁でしょうか」と問われると、「仁に近いけれども仁ではない」と答えるような繰り返しでした。お弟子たちは、仁とはなかなか得ることが出来ない遠いもので、一生涯到達できない境地だと思い込んでいるものを、そうではなく本気で求めれば仁に到達できるのだと強調し始めたところだと感じます。

仁を理想郷と捉えれば、今回の東日本大震災の復旧・復興で考えると、菅さんが東北地域を復興させたいと本気で考えたならば、今のような動きはしていない。本気で理想郷を復興させようと思ったのであれば、もっと違う動きになるはずです。

自分自身が何か手に入れたいと思った時に、本気で欲すれば意外に労せずして手に入るという事例は沢山あります。本気になるかならぬかが、この文章のポイントだと思います。

【三十】 陳ちんの司敗しはい 問とう、昭公しょうこう 礼れいを知れるかと。孔子こうし曰いく、礼れいを知れりと。孔子こうし 退しりぞく。巫馬期ふばきを揖ゆうして、之これを進めて曰いく、吾われ 君子くんしは党とうせずと聞きけり。君子くんしも亦また党とうするか。君きみ 呉ごに取り、同姓どうせいなるが為ために、之これを呉孟子ごもうしと謂いえり。君きみにして礼れいを知らば、孰たれか礼れいを知らざらんと。巫馬期ふばき 以もつて告つぐ。子曰しく、丘しゅう や幸さいわいなり。苟いやしくも過あやまち有れば、人ひと 必かならず之これを知ると。

陳という国の司法長官が孔子を試したのです。

陳の司法長官が孔子に「魯国の昭公は礼儀を知っている人物か」と聞きました。孔子は、「昭公は礼儀を知っている人物です」と答えました。

孔子が退いた後で、司法長官は孔子の弟子の巫馬期を呼び寄せて、「君子というものは、悪いことをした者をたとえ身内であってもかばうことはしないと聞いているが、君子と云われる孔子もまた、自分の身内をかばうのか。昭公が呉国から夫人を迎えた時に、同姓同志は結婚しないものなのに、呉孟子と夫人の名前を言い換えた。こういう礼儀に外れたことをする昭公が礼を知っているというのであれば、世の中に礼を知らない人はいないだろう」と言った。

巫馬期がそれを孔子に告げたところ、孔子が「私は幸せ者だ。私が間違いをすれば、必ず誰かが教えてくれる。これは有難いことだ」と答えた。

孔子は自分が非難されているのだけれども、非難の中身が事実だから、「そういうことを教えてくれるとは有難いね」とさらっと流したわけです。

菅さんも孔子のように、過ちを指摘されたら、「私の知らないことを追求し教えてくれる人がいて、私は幸せ者だ」とさらっとできれば、叩かれ方も受け取られ方も違うのではないかと思います。この2ヶ月間を見ていると、菅さんは謝らない。ミスを認めない。これでは人物がどんどん小さく見えて、人気も落ちていきます。それから発言を聞いていると、形容詞が多い。「最大限の努力をします」とか「全力投球でがんばります」「しっかりやり

ます」という言い方をします。責任を問われないような言い方ばかりで、「何時までに致します」という結果を、ひとつも言っていません。「何々を実行したいと思います」と、思うだけで実行しないのかと、政治家の答弁を聞いているといつも思ってしまいます。

【三一】 子^し 人^{ひと}と歌^{うた}いて善^よければ、必^{かなら}ず之^{これ}を反^{かえ}さしめて後^{のち}に之^{これ}に和^わす。

孔子はよほど歌が好きなのだと感じました。

孔子は良い歌を歌っているのを聞いたなら、もう一度歌ってもらい、自分も一緒に声に出して覚えようとする。

歌と一緒に歌うと親近感が増して、非常に親しくなってきます。孔子は無意識のうちにもこういうことをやっているなと感じます。私は団塊の世代ですから、昔、歌声喫茶というものがありましたが、確かに隣に座った人と、見ず知らずでも仲良くなれる。最近、歌声喫茶が復活したという話をちらりほらり聞きます。歌の効用はかなりあると思います。

【三二】 子曰^{しいわ}く、文^{ぶん}は吾^{われ} 猶^{なほ} 人^{ひと}の猶^{ごと}きこと莫^なからんや。躬^み 君子^{くんし}を行^{おこな}うは、則^{すなわ}ち吾^{われ} 未^{いま}だ之^{これ}を得^うること有^あらず。

孔子が言うには、私は書物の上の学問は人並みに出来ないことはないが、自分自身で君子らしい行ないを実践するのは、まだ出来ない。これからもっともっと君子らしい行ないを実践したいものだなあ。

こういう人はなかなかいませんね。

被災地を回って

では、被災地に行って来た話を致します。

最初に那珂湊から入りました。那珂湊は魚市場があるのですが、店は再開されていません。瓦礫が店の中に入ってきたそうですが、腰あたりの高さくらいだったので、自分達の力で瓦礫を取り除いて市場を再開することが出来た。かなり早い段階で那珂湊は復旧を遂げていました。それは、瓦礫を取り除いてお客さんに来てもらおうという未来に対する強い希望があって、想像以上の力を出して短期間で復旧をしたのだろうと感じました。

那珂湊から東海村～鵜の岬～いわき市へ行きました。鵜の岬には、日本で一番予約の取

りにくい人気の国民宿舎があります。そこに行きましたら、温泉が出なくなっていました。水道水を沸かして被災者に無償で風呂を提供していました。

郡山から高速道路で福島を避けて仙台に入りました。多賀城に行きました。多賀城はもと、東北地方に入る玄関口となっている要衝です。多賀城は町の中まで瓦礫の山がありました。川を津波が逆流してきたので、川の周辺がかなりの被害を被っていました。以前も同じようなことがあったそうで、あまり経験が活かされていないと感じました。

次に塩釜に参りましたが、ここは酷かったです。瓦礫の山の中で、信号は当然作動していませんから、交差点で警察官が 5、6 人で交通整理をしていました。町の中の建物は皆、無残に崩れていて、つぶれた車がゴロゴロしていて、まるで幽霊が出てきそうな感じがしました。

松島～石巻～女川～浦宿とリアス式海岸を通って、仙台～一関は高速に乗りました。次いで気仙沼～陸前高田～大船渡～釜石と北上しました。ここはもう瓦礫の山で、自衛隊の人たちが仮設道路を作ってくれたので走れるようになっていました。ただ、ナビが全く使えませんでした。目の前は瓦礫の山で、道がないのです。自衛隊の人たちが瓦礫の中で遺体探しをしていました。

阪神淡路大震災や新潟地震の時も、私は現地に行って写真を撮ったのですが、今回被災地に行った色々な人の話を聞くと、「シャッターが切れなかった」とか、「言葉を失う」という表現が多くて、何なのだろうと思っていたのですが、確かにシャッターは切れませんでした。この建物くらいの高さまで瓦礫が積みあがっていて、はるか彼方までそうになっている。瓦礫と瓦礫の中に、辛うじて車が通れるような道路が出来ていて、そこを車で通って行ったのですが、この中に死体がどれだけ埋まっているのだろうと思うと、シャッターは切れませんでした。しかし瓦礫の山の上の方に桜の花が咲いていたのは、ホッと写真を撮りました。桜の花は被災地の中で結構咲いていましたから、被災者も桜を見て、ほんの少しでも心が安らぐだろうと感じました。やはり現地に行ってみる、体験しておくことは必要だと強く感じました。

釜石から通行不能の路がかなりありましたから、遠回りをしながら遠野～宮古市（田老）に入り、普代村～野田村～久慈市～青森県九戸市～弘前と動きました。

ずっと回ってみてつくづく感じたのは、トップリーダーの存在を意識しました。行った先々の市役所や町役場を訪ねました。そうすると、統制がとれていて、外部の人の対応であるとか、援助物資の仕分けをして被災者に渡すような仕組みがきちんと機能している役場と、機能していない役場に極端に分かれていました。やはり行政のトップが全体を見渡

して、役場全体が人もサービスも機能できるようにすることが重要です。役場自体が流されてしまって、他所に移動しているところもありましたが、機能しているかないかは、そこで働いている人たちの明るさであったり、てきぱきとした行動であったり、復旧・復興にむけて前向きに仕事しているかで分かります。

それから、古老の言い伝えは役に立つのだなと思いました。先ほど申しました普代村の15.5メートルの堤防もそうですし、普代村の少し北にある野田村では、「大地震が来たら源平坂に逃げろ！」という古老の言い伝えがあったそうで、実際に野田村の保育園では子供たちを非難場所よりも奥の高台にある源平坂に避難させて、間一髪で助かった。又、石碑もありました。私が見たのは、「地震があったら、津波に用心せよ」という石碑でした。又、「ここより下に家を建てるな」という石碑もあるそうで、現実にその石碑まで水が来たそうです。その石碑の下に建てられた家は皆、流されてしまったという記事がありました。山田町の田の浜地区では昭和津波の後に、高台に12000坪の土地を手当てして240戸が移転したのだそうです。移転をした240戸は全部助かったそうです。これらは皆、古老の言い伝えを律義に守ったわけで、昔からの言い伝えは役に立つなと思いました。

今、液状化現象が騒がれています。古地図を調べてもなかなか出てきません。今の住所は結構名前が変わっていますから、ひと昔前の地名を調べる必要があると思います。それが水に関係ある名前だったなら、液状化の危険性を考えた方がよいだろうと思っています。

義援金

今回、義援金がかなり集まって、被災者に渡すべく努力をしているようですが、なかなか届いていません。

寄付には、義援金と寄付金と支援金があります。寄付する先によって被災者には届かない場合が結構ありますから、どういう団体にどういう名目の寄付をしたのか、承知して出さなければいけません。例えば今回、ボランティアとして、かなりのNPOが動きました。そこにお金を寄付する場合、NPOの活動資金になって被災者には直接には届かない。赤十字社を通じて被災者に分配するのが義援金となっていますが、私はどこまで本当かなと思ってしまいます。真偽は分かりませんが、関東大震災の時は6割が被災者に渡って4割は消えたというデータがあるそうです。日本人は、今回集まった義援金が皆、東日本大震災の被災者に渡ると信じて疑わないと思いますが、誰からどれだけの援助があったか明確に分からないのですから、多少は途中で消えているのではないかと思っています。ですから寄付をする場合、相手を特定して直に渡す。又は、渡したいと思う人に間違いなく渡せ

のような仕組みの寄付の仕方が必要なのだらうと思います。ちなみに私は、どういう理由でどこに、相手は誰か、明確に分かるような寄付をしました。

日本人はお金を追いかけませんね。税金も、出したら出しっぱなしで追いかけません。東日本大震災を契機に日本人は変わってくれたら良いなと思いましたが、今の流れを見ると、日本人は変わらないなと少し失望しています。但し、変化の芽は沢山出ています。この芽がだんだん育って、3、4年もするとそれなりになるという希望も、被災地を回って感じました。

東日本大震災を考える

ものごとを考える時には、本質・大局・歴史で見ましょと申し上げています。判断する際には、知識・見識・胆識と言いましたが、古老の言い伝えを尊重し防潮堤を造った村長は、知識はありました。こうすべきであるという見識も持っていた。そして実行したのですから胆識もありました。

東日本大震災の本質を考えると、日本という国は地震列島だと自覚する必要があります。地震の巣のような海沿いの山国に我々は住んでいるのだと、どこかで実感しなければいけない。今回私はリアス式海岸を北上しました。海岸線を実際に見ると、三角形の湾なのですから、海岸から入ってくる波は勢いがついて、三角形の突端に来るとどんと跳ね上がる。30メートル以上の津波が何箇所も来たというのも当たり前だと感じました。しかしそこに住んでいる人は、危険性をさほど感じない。高台に逃げると言っても、海岸から少し離れると、後が山なのです。平地が僅かしかないのです。青森に住んでいた人の話だそうですが、津波は来て当たり前、津波が来たら家が流される。家が流されたら新しい家を作る。50年もしたら、また津波で家が流されて、新しく建てる。但し逃げることはしっかりするのだと聞きました。こういうサイクルが出来ている。地域地域で知恵というものが定着しているのだなと感じました。

日本が地震列島だということを自覚すれば、色々な動きが出来るし、自ずから動きが変わります。現実には東京湾は、入り口が狭くて中が広い逆三角形ですから、津波はそれほど大きくないと予想していたようですが、想定外以上の津波が来た。東京直下型の地震が来た場合は、とんでもないことになります。やはり即座に対応策を練る必要があります。

我々も用心しておくことです。色々な方にお聞きしますと、食料や水の備蓄をしていた人というのは、半分でした。用意していた人でも3日とか1週間程度で、1ヶ月という人もいましたが、水は持たなかった。足りなくなって買いに行っても、売り切れてしまって

手に入らなかったそうです。

次に、大局を考えます。今回私が感じたのは、日本と世界は繋がっているということです。世界的に見て、日本は発信力が非常に弱い。情報が世界を駆け巡る時の速さは凄まじいなとつくづく感じています。腹が立ったのは、政府は放射能汚染予報なるものを外国には発信していたけれども、国民には教えていない。世界から見て今回の東日本大震災はどうなのか、というものの見方が必要です。私は日本と世界はかなり繋がっていると感じました。

最後に歴史で考えますと、日本の歴史を真剣に調べて継承する重要性を感じます。古老の言い伝えを守って助かった普代村、そして「ここより下に家を建てるな」という石碑があったにもかかわらず、同じ被害にあっているところ。日本という国は、古老の言い伝えを仕組みとして伝えない国になっているのだと感じます。

昨日、WHO（世界保健機構）が世界の平均寿命を発表しました。日本人は平均寿命 83 歳、女性は 86 歳で世界 1 位、男性が 80 歳で 2 位だそうです。これだけ平均寿命が延びたというのは素晴らしいことですので、それを大いに活かさなければならないと思います。

今回の東日本大震災で、何とひ弱な医療で守られている高齢者が多いかと感じました。被災した時に高齢者を守るような仕組みが、今の日本にはないのだとつくづく感じました。

国家公務員の給料を 10%削減というところで調整中のようなのですが、地方公務員もあわせてせめて 20%カットすれば、かなりの原資ができると思います。政治家も官僚も、もっと身を削って東日本大震災に真剣に向き合うべきではないかと思います。我々に出来ることは、義援金や支援金、又はボランティアでもよいから、出来ることを少しずつやる時期に来ていると感じます。

以上で本日の講話は終了です。